

### 阿部定高

重次の子。初名正貞、また貞勝、成利といふ。寛永十二年生る。慶安四年八月遺領を継ぎ、新墾の田一萬六千石を弟三浦吉兵衛正春に、六千石を従弟阿部市正正令に分ち與ふ。十二年從五位下備中守に叙任す。承應元年正令の知行六千石を還附せらる。萬治二年正月死。年二十五。岩槻淨國寺に葬る。【六】

### 阿部重次

正次の子。慶長三年生る。初め三浦監物重成の養子となり、其の女を室とし秀忠に仕ふ。後家督を辭し別家して近江淺井郡三千石を知行す。元和五年十二月從五位下山城守に叙任す。寛永五年兄政澄の死により家父正次の嗣となり阿部氏に復す。十年三月松平信綱、阿部忠秋等五人と共に政事を議せしめられ六人衆といは

### 阿部正精 阿部正邦

る。十五年四月父の封地四萬六千石を賜はり、自らの舊封地一萬石餘と併せて五萬九千石を領し岩槻城に居る。十一月老中に列せらる。慶安元年父の遺領三萬石を併せ總て九萬九千石餘を領す。同四年四月將軍光榮するに及び之に殉死す。時に年五十四。芳松院と諡す。【六】  
天保改革篇掲出。【六】  
初名正盛、定高の子。萬治元年四月生る。寛文十一年十二月父の遺領九萬九千石餘を賜ひ、從五位下對馬守に叙任す。天和元年二月岩槻より丹後宮津に移され、ついで元祿十年二月下野宇津宮に移さる。加封して總て十萬石を領す。十三年十二月從四位下に叙す。寶永七年閏八月備後國福山城に移され、深津、沼隈、廣田、

### 阿部正右

品治、安那五郡を領す。正徳五年正月死す。年五十八、長生院と諡す。江戸淺草西福寺に葬る。【六】

### 阿部正次

正福の子。初名正治。享保八年生る。元文三年十二月從五位下伊豫守に叙任し、寛延元年十一月封を襲ぐ。寶曆二年四月奏者番に列し、六年五月寺社奉行を兼ね。十年十二月所司代となり、從四位下侍從に昇る。明和二年十二月老中に列せらる。同六年七月死。年四十六。法名會開院。【六】  
初名正成、幼字徳千代。正勝の子。永祿十二年參河に生る。慶長五年父の遺跡を嗣ぎ御書院番頭となり、ついで從五位下備中守に叙任す。其後相模一宮の地五千石を加賜せられ、總て一萬石を領し武藏鳩谷に居る。後累加して八萬六千石となり、上總

近世日本國民史 人物概覽

### 阿部正福

大多喜、相模小田原、武藏岩槻等に移封せらる。元和元年五月大阪の役功あり。ついで奏者番、大阪城番等に累任す。正保四年十一月大阪城中に於て病に罹り死す。年七十九。英隆院と諡す。【六】

### 阿部正倫

初名正岑。また正縁、正譽、正意等の名あり。正邦の子。元祿十三年生る。正徳四年十二月從五位下伊勢守に叙任し、五年三月遺領を繼ぐ。延享二年十一月大坂城代となり、從四位下に進む。四年十二月職を辭す。寛延元年十一月致仕し、明和六年十月死。年七十。法名徳輪院。【六】  
正右の子。母は中島氏。延享三年生る。明和四年七月嫡子となり、從五位下備中守に叙任す。六年八月遺領を嗣ぎ福山十萬石を領す。安永三年

阿部正寧

奏者番となり、八年四月寺社奉行を兼ね。天明七年三月老職に進み、從四位下に昇り、伊勢守と改む。八年二月辭職。文化二年八月死。年六十一。法名照徳院。【六】  
正精の三男。通稱寛三郎。文化六年十月江戸に生る。母は井出氏。正精の二男天するを以て嫡子となり、父の後を嗣ぐ。天保七年十二月退隱す。明治三年七月死。年六十二。【六】  
幕府分解接近時代揚出。【八六、八七、一〇〇、一〇一】

新井白石

青山忠良

因幡守と稱す。天保十一年大坂城代に補せられ、ついで下野守と改む。弘化元年老中に補せられ、嘉永元年九月病により辭し雁の間詰を命ぜらる。某年死。【一六】

井

猪飼敬所

名は彦博、字は希文、敬所は其の號なり。世々近江の人たり。京都に生長す。岩垣龍溪の門に學び、専ら經學を治め、徒に授くる五十年。晩に津藩に賓師となる。弘化二年十一月彼地に歿す。年八十五。津市龍澤寺に葬る。【三四】

石川忠房

岩次郎、太郎右衛門、また六右衛門等と稱す。忠國の養子。明和元年八月父の遺跡を嗣ぎ慶米三百俵を賜はる。安永二年十二月大番となり、天明八年十月組頭に轉じ、寛政三年五月御日付となる。四年十一月露人來航のことにより松前に赴き、翌年十月歸る。七年四月御作事奉行に移り、十二月從五位下左近將監に敘任し、

石川瞻之丞  
伊澤美作守

板倉勝明

九年八月御勘定奉行に進む。漸次加増せられて五百石を食む。十年道中奉行を攝す。十三年春再び命を奉じて蝦夷に赴き各地を巡視して歸る。文化三年西城留守に移り、五年小普請支配となる。文政二年再び勘定奉行となり道中奉行を攝す。十一年大坂留守となる。天保七年正月死。年八十二。【六〇】  
天保改革黨揚出。【三〇、三三、三六】  
名は政美、また政義。天保改革黨揚出。【一六、一七、六六】  
字は子赫、甘雨また節山人と號す。瑞光公勝尙の子。文政三年五月父の死にあひ封を嗣ぐ。時に年十二。七年十一月從五位下伊豫守に敘任す。天保五年加番を以て大坂城を成す。明年八月任滿ちて歸り、十年再

近世日本國民史 人物概覽

板倉重宗

其任に赴く。十四年十一月奏者番となり、十五年五月病を以て免職。幼より穎悟にして國書を讀むを好み、長じて林樞宇、古賀洞庵を延き經史を講究す。大阪にあるや、篠崎彌、後藤機等を召し學を論ず。著書西征紀行、東還日記、中禪寺紀游及び文集若干卷あり。又甘雨亭叢書若干卷を印行す。安政四年四月死。年四十九。【六】  
勝重の長子。重昌の兄、天正十四年駿府に生る。慶長庚子役に從ふ。十年四月從五位下周防守となる。大阪役また從ふ。元和六年父に嗣いで、京都所司代となる。九年從四位下に敘す。又屢々加封あり。寛永元年父の遺跡を嗣ぎ、總て三萬八千石餘を領す。十年また加封五萬石となる。

鳥原一揆起るや處置最も宜し。正保二年少將に任じ從四位上に昇る。承應三年職を辭す。明暦二年下總國關宿城を賜はる。同年十二月死。年七十一。【一〇三】

エ、エ

江川英龍

江川太郎左衛門に同じ。天保改革篇掲出。【三七、三九】

越後少將忠輝

家康の第六子。長澤松平氏の嗣となる。慶長七年十一月下總佐倉四萬石を賜ひ、十二月從五位上、上總介に任ず。八年川中島十八萬石に移封。十年從四位下左近衛少將となる。十五年越後六十二萬石に轉ず。大阪役事を以て罪を家康に得、元和二年七月封を奪ひ伊勢朝熊に放たる。次いで飛騨高山に徙り、又信濃

越前參議忠直

諏訪に徙り、天和三年七月諏訪に死す。年九十二。【一〇四】  
結城秀康の子。慶長十六年三月元服。秀忠の諱字を賜はる。從四位下に敘し、左近衛權少將に任じ、三河守を兼ぬ。大阪役先登して城を陥れ功あり。元和元年閏六月從三位に陞り參議に任ず。然れども是より漸く豪縱放逸、酒色に荒淫す。元和八年五月遂に豊後萩原に配し穀五千石を給せられ、刺髮して一伯といふ。尋いで津森に遷る。慶安三年九月配所に死す。時に年五十六。【四】

オ、ヲ

お糸の方

奥御右筆組高木新三郎源廣充女。文化十年中江戸城本丸御次となり後御

大岡主膳正

中舘となる。琴姫、永姫、千三郎、紀五郎、周丸等を産む。【一】  
名は忠固。武州岩槻藩主、二萬石を領す。天保七年九月奏者番より西丸若年寄となり、十二年七月若年寄に移り勝手掛并海防掛たり。弘化二年五月三千石加増。嘉永五年七月死。【一一、二九】

大久保因幡守

名は忠豊。天保十四年二月小姓組番頭となり、同十五年九月浦賀奉行となる。弘化四年五月書院番に轉じ、嘉永五年七月大番頭に移る。安政五年六月側衆に任じ、文久二年五月免ぜらる。【二五、四二、四三】

大澤豊後守

名は康哲。仁十郎と稱す。弘化四年八月目付となり、嘉永五年五月長崎奉行に移り、七年五月小普請奉行となる。安政四年二月作事奉行に轉じ、  
近世日本國民史 人物概覽

【力行】

カ

孝明天皇

御諱は統仁、仁孝天皇第四皇子。御母は新待賢門院雅子。贈左大臣藤原實光の女。天保二年六月御降誕、十一年三月立つて皇太子となる。弘化三年正月踐祚、時に御年十六。在位二十一年。改元するもの六。慶應二年十二月廿五日崩御。京都泉涌寺後月輪の山陵に葬り奉る。御壽三十六。【八五】

春日局

名は阿福、齋藤利三の女。父の死後、  
一七

和子

母と共に潜居し、長じて稻葉正成に嫁し、正勝、正利を生む。之を久うして大歸し母と家居す。慶長九年家光生れ乳母を擲ぶに當り、海北友松の周旋により其の選に當り、改めて春日局といふ。從三位に敘し、三位局とも號す。人となり敏辨貞淑、内治に參與す。家光將軍となるに及び、其の功績を思ひ寵遇殊に渥し、後自ら請うて江戸湯島に天澤寺を起し、特命を以て香花料三百石を附せらる。後從二位に進み寛永二十年九月死。麟祥院仁淵了義と號す。【九】  
後水尾天皇皇后。徳川秀忠の女。慶長十二年十月江戸に生る。元和六年六月入内、女御となる。寛永元年十一月立つて中宮となる。六年十一月東福門院と號す。明正天皇、昭子内親

勝海舟  
荷田東磨

川路聖謨

王、高仁親王、顯子内親王、賀子内親王等を生む。延寶六年六月崩す。御年七十五。泉湧寺に葬る。【一〇三】  
天保改革篇掲出。【一三、二五】  
羽倉氏、通稱を齋宮といふ。洛南稻荷の祠官なれども、家を弟に譲りて専ら國學の研究に従ひ、斯學の復古を主張せり。遂に神代卷と萬葉集とに於て家學を成す。後京都に國學の學校を起さんとして官許を得、地をトするに及びしが、其事成らずして死す。時に元文元年七月二日。年六十九。著書神代紀抄、古今集古註考、萬葉集童蒙抄、出雲風土記考、春葉集、創學校啓、伊勢物語童子問等今も世に行はる。【九三】  
文政天保時代篇掲出。【二五、六〇】

賀茂真淵

寶曆明和篇、田沼時代掲出。【九一、九三】

北畠親房

北畠准后に同じ、雄藩篇掲出。【一〇〇】

久須美佐渡守

名は補明。六郎左衛門と稱す。天保十一年十二月納戸頭より佐渡奉行となり、十四年五月大阪町奉行に移る。十五年十月勘定奉行公事方となり、嘉永三年七月西丸旗奉行となす。【三七】

久世丹波守  
久世大和守

名は廣民。田沼時代掲出。【六三】  
名は廣周。通稱謙吉。實は大草安房守高好の二男。下總關宿城主久世廣運の養子となる。文政十三年十月榮父の遺領五萬八千石を賜はる。天保近世日本國民史 人物概覽

熊澤了介  
光格天皇

契冲

二年從五位下隱岐守に叙任す。後出雲守また大和守と改む。天保十四年寺社奉行となり、嘉永元年十月西丸老中に移り正四位下に叙し翌年侍從に任ず。四年十二月本丸老中となり、安政五年十月辭す。萬延元年閏三月再び老中に任じ勝手並外國掛りとなる。同年十二月一萬石加増。文久二年六月事により職を奪はれ、ついで加増一萬石を削らる。因て家を嫡子廣文に譲り隱居謹慎す。元治元年六月死。年四十六。【三七】  
松平定信時代掲出。【一〇五】  
松平定信時代、幕府分解接武時代、天保改革篇掲出。【八五、一〇三】  
字は空心、俗姓は下川。尼ヶ崎青山

僕の家臣元全の子。年十一、出家して攝津今里妙法寺孝定法師に従ひ、十三歳高野山東室院快賢に従ひ學ぶ。寛文以後諸方に雲水苦行す。學ば和漢佛をかれ、殆ど涉獵せざるなし。後孝定の遺命により妙法寺に住し、母を延て孝養す。ついで院を退き難波の高津に居り圓珠庵と號す。元祿十四年正月死。年六十二。著書萬葉代匠記の外二十數種あり。【九三】

### 源 敬公

徳川義直に同じ。家康の第九子。母は相應院志水氏。幼字五郎太丸。慶長八年正月四歳にして甲斐國二十四萬石を賜ひ、十一年八月元服を加へ從四位下右兵衛督に叙任し、十二年閏四月尾張國に轉じ美濃信濃の地を合せて、六十一萬九千五百石餘を領し、清洲に居る。十五年名古屋城を

### ケンフェル

繁き移る。十六年三月從三位參議に陞り右中將を兼ね。大阪兩度の役従ふ。元和元年美濃の地三萬石を加へ、三年七月正三位權中納言となり、寛永三年八月從二位權大納言に進み、慶安三年六月死。年五十一。【九三】  
文政天保時代掲出。【一〇六】

コ

### 後光明天皇 後藤庄三郎

松平定信時代掲出。【一〇三】  
光次に同じ。天保改革篇掲出。【三四】

### 後堀河天皇

御名は茂仁。高倉天皇御孫。後高倉院守貞親王の第三子。御母は北白河院藤原陳子。建曆二年二月御降誕。承久三年七月北條氏に迎へられて天皇の位に即く。時に御年十歳。在位十一年、改元するもの六。貞永元年

### 後水尾天皇 後陽成天皇

十月位を四條天皇に譲り文曆元年八月崩す。御壽二十三。京都下京熊野町觀音寺陵に葬る。【二四】  
幕府分解放近時代掲出。【一〇三】  
寶曆明和篇掲出。【一〇三】

### 【サ行】

サ

### 酒井家次

忠次の長子、母は松平清康の女。永祿七年三河に生る。天正十六年十月襲封、十七年十一月從五位下宮内大輔に叙任す。十八年八月下總白井城三萬石を領す。慶長庚子の役秀忠に従ひ功あり。九年十二月上野高崎に移され二萬石を加増せらる。後左衛門尉に改む。元和大阪の役また功あり。同二年越後高田に移り總て十萬石を領す。四年三月死。年五十五。

近世日本國民史 人物概覽

### 酒井忠勝

圓譽宗慶梅林院と號す。【二】  
家次の子。文祿三年生る。後、秀忠より諱字を賜はる。十四年正月從五位下宮内大輔に叙任し、元和四年遺領を繼ぐ。五年三月高田を改めて信濃松代に移され、ついで八年八月出羽莊内鶴岡に轉じ總て十三萬八千石を領す。寛永三年九月從四位下に昇り所領も十四萬石餘となる。正保四年十月死。年五十四。莊内大督寺に葬る。【二】

### 酒井忠次

小字小平次、小五郎、また左衛門尉と稱す。大永七年三河に生れ父祖の後を繼ぎて徳川氏に仕ふ。姉川、長篠諸役、天正十年信濃攻略の役、小牧、長久手の役等功あらざるばなし。天正十四年十月家康の入洛に従ひ從四位下左衛門督に叙任し、豊臣秀吉

より京都櫻井にて宅地を與へられ、且つ近江國内にて二千石を授け在京の料とせらる。十六年十月致仕して櫻井の邸に住す。慶長元年十月櫻井に死す。年七十。京都知恩院に葬る。

【一】

幼字豊太郎。忠温の子。寶曆五年生る。明和三年十二月從五位下攝津守に叙任し、四年二月遺領を繼ぐ。三月左衛門尉に改む。安永二年從四位下に陞る。天明八年東海道河川堤防疏通の役を助け、寛政八年京都に使し侍從に進々、九年五月參内して天皇に謁し天盃を賜はる。享和三年甲州河川堤防の工を助く。又藩政に留意し、學校を經營し、教化の隆興を圖り、民政改革、勤儉風行、富強の基を立て治績見るべきもの少なから

### 酒井忠徳

榊原主計頭  
佐藤信淵

眞田幸貫

シ

柴野彦輔

柴 栗山

澁川助左衛門

澁川六藏

澁井大室

す。文化二年病により致仕。家を子忠器に譲り右兵衛佐と稱す。九年九月死。年五十八。【一、四、五】

天保改革篇掲出。【一〇、一二、三三】

天保改革篇掲出。【七二、七三、七四、七五、九〇、九三】

天保改革篇掲出。【一〇、一二】

田沼時代、雄藩篇掲出。【九五】

柴野彦輔に同じ。【九九】

天保改革篇掲出。【三〇】

天保改革篇掲出。【一三、三〇、三一、三二】

通稱平左衛門、名は孝徳、字は子章。下總佐倉の人。父重之出で、林氏に仕ふるに及び、從ひて江戸に來り井上蘭臺に學ぶ。ついで林權字の門に

遊び、都講となる。篤學の名一時に顯はる。佐倉侯召して伴讀とす。時に年二十四。當時の碩儒秋山玉山、細井平洲、名越南溪等と交る。天明七年藩侯の大坂城代となるに及び從ひ行き、遂に老職となる。明年六月大坂に死す。年六十九。著書建官考、典禮考、勢迷手輪具佐、名勝考、職官考、扶桑名勝、左國通議其他數種あり。【八六】

### シーボルト

一

初名忠恒、義弘の第三子。幼字米菊丸。又八郎と稱す。天正四年加久藤城に生る。文祿朝鮮の役軍に從ひ功あり。慶長四年正四位下少將に叙任し、九年陸奥守となり、尋で中將に昇る。十一年九月徳川家康の

### 島津家久

近世日本國民史 人物概覽

島津重豪  
島津齊彬

諱字丸賜ひ今の名に改む。十四年幕府に乞うて琉球を征す。元和三年七月參議に任じ、九月松平の稱號を賜ひ薩摩守と稱す。寛永三年從三位權中納言に昇り、八年四月大隅守に改め、十五年二月死。年六十三。【二〇、二一、二二、二三】  
雄藩篇、文政天保時代掲出。【二三】  
雄藩篇掲出。【二三、二四、二五、二六、二七、二八】  
天保改革篇掲出。【三五】

新見伊賀守

又

崇源院夫人  
杉田玄白

文政天保時代掲出。【九】  
字は子鳳、鶴齋と號す。享保十八年生る。長じて西玄哲の門に入りて醫を學び、後西幸作に從つて蘭語を受く。學習に精を勵まし、家學の擴張を勉めて毫も怠ることなし。文化十

四年四月死。年八十五。其著作體新書は同志中川淳庵、前野良澤等と提携して翻譯し、三箇年を費し、十一回稿を改めたりといふ。其他瘍科大成。和蘭醫事問答書等の著あり。【六五】

駿河大納言

名は忠長。徳川秀忠の第三子。家光の同母弟なり。慶長十一年生る。小字は國千代廣。或は國松廣。幼にして穎悟、元和三年始めて信州小諸城に封ぜられ後駿府城に移り、駿河、遠江、甲斐の内を領す。然れども事により幽閉せられて上州高崎城主安藤重長に預けらる。寛永九年十一月自殺す。年廿七。高崎大信寺に葬る。【四、一〇四】

【夕行】

て京都に遊ぶ。後また江戸に來り、荻生徂徠の門に入り大に復古學を主唱す。徂徠の死するや、門流分れて二となり、詩文は服部南郭を推し、經術は春臺を推すといふ。春臺また斯文を以て己れの任とすといふ。延享四年一月死。年六十八。著書數十種あり。【八八、八九】

太宰門

鎮守府將軍長將の第三子。勇敢人に絶し、尤も騎射に巧みなり。少にして攝政藤原忠平に仕へ、檢非違使たらんことを求め、其の成らざるや憂憤して下總に赴き豊田郡に居り、頗りに附近の地を掠む。常陸大掾平國香、上總介平良兼等兵を出して之と戦へども克たず。將門遂に進んで上野下野に入り其守介を追ひ益々暴威

近世日本國民史 人物概覽

夕

高島秋帆

雄藩篇、文政天保時代、天保改革篇掲出。【三七、五九】

高島四郎太夫

秋帆に同じ。【二九、三七】

高野長英

文政天保時代、天保改革篇掲出。【二一】

高橋作左衛門

文政天保時代、天保改革篇掲出。【七一】

高山正之

高山彦九郎に同じ。田沼時代、松平定信時代、雄藩篇、文政天保時代掲出。【八五、一〇五】

竹内式部

寶曆明和、幕府分府接近時代、文政天保時代、天保改革篇掲出。【八六、九九】

太宰春臺

名は純、通稱は彌右衛門、春臺また紫芝園と號す。言辰の子。幼時父に従つて江戸に出で學を修め、稍長じて仙石侯に仕へ、數年にして致仕し

を還す。天慶三年正月朝廷遂に藤原忠文を將として之を討たしめんと欲す。是に先だち國香の子、貞盛下野押領使藤原秀郷と共に來り襲ひ、遂に將門を殺す。世に之を天慶の亂といふ。【一〇一】

ツ

調所笑左衛門

雄藩篇掲出。【二四、二五】

筒井紀伊守

政憲に同じ。【二四、二五】

筒井政憲

文政天保時代、天保改革篇掲出。【二五、六八、六九、七一、七八】

東條文藏

一堂と號す。名は弘、幼字和七郎、上總國夷隅郡八幡原村の人。安永七年生る。父自得江戸に出で醫を業とし

治術遠近に聞ゆ。文藏十三にして志

を立て京地に入り諸名家に就き苦學數年、十八歳にして一たび江戸に歸り父母を省し再び京に上り其名漸く高し。廿二江戸に歸り朝川善庵、羽倉簡堂等と交る。遂に弘前藩に聘せられ督學となりしが建言多く用ひられず、去つて江戸駒込に帷を下し諸生を教授す。之より諸侯、播磨來り學ぶもの多し。殊に福山侯阿部正弘最も意を傾けて優遇す。著書三十餘部あり。安政四年七月死。年八十。

【六】

土井利位

文政天保時代、天保改革篇掲出。【五、一〇、一一、三七】

土岐丹波守

天保改革篇掲出。【三六、四〇、四一、四二】

徳川家定

天保改革篇掲出。【七】

徳川家齊

松平定信時代、幕府分解接近時代、

徳川家光

雄藩篇、天保改革篇掲出。【一、四、六、七、九】

徳川家康

松平定信時代、雄藩篇、文政天保時代掲出。【一六、五九】

徳川家慶

家康時代以下各篇掲出。【九、八七、一〇二、一〇三】

徳川綱吉

文政天保時代、天保改革篇掲出。【四、七、九、一二、一八】

徳川秀忠

幕府分解接近時代、天保改革篇掲出。【一】

徳川光圀

文政天保時代篇掲出。【一〇三】

戸田忠温

松平定信時代、雄藩篇掲出。【七四】

遠山左衛門尉

天保十四年十一月下野宇都宮藩主。天保十四年十一月寺社奉行より西丸老中となり、弘化二年三月老中となる。嘉永四年七月死。【六、一〇、一六】

天保改革篇掲出。【六、三三、三六】

鳥居甲斐守

忠耀に同じ。天保改革篇掲出。【一〇、一一、二九、三〇、三一、三三、三四、三七】

鳥居忠耀

天保改革篇掲出。【一〇、一一、三〇】

豊田亮

通稱彦次郎、字は天功、松岡と號す。常陸久慈郡深萩に生る。幼より穎悟、遂に召されて水戸藩に仕へ藤田圃谷の門に寓し。東湖等と共に切磋し、才學益々顯はる。爲に擢んでられて學職となり、彰考館編修を兼ねしめらる。弘化元年藩主齊昭幕議を獲るの時、書を幕閣に呈し辯疏に力め、却つて罪を得、禁錮せらる。五年を経て許され、復修史の任に當り、北

【ナ行】

十

中井竹山

松平定信時代掲出。【八六、九九、一〇〇】

鍋島内匠頭

名は直孝。齊直の第二男、餅木家を嗣ぐ。天保十四年十月小普請組支配より町奉行となる、嘉永元年十一月大頭となり、二年十二月辭す。【三七】

鍋島齊正

小字貞丸。齊直の子。直孝の弟。文化十一年十二月生る。天保三年家督を嗣ぐ。後左近衛權中將に通む。明治維新の初め議定職となり、開拓使長官從二位大納言に累進す。四年正月死。年五十八。性聰明にして文武の材を兼ね、夙に西洋文物の隆興に

元治元年正月死。年六十。明治三十

鑑み自ら儉約を守り、教育及び殖産興業に意を用ひ、又海防に力を盡し大に人材を養成し、治績頗る見るべきものあり。版籍奉還の舉實に其力による事大なり。死後松原神社に祀られ、明治八年縣社に列せらる。三十二年從一位を贈らる。【一七】

ナポレオン  
成島圖書頭  
南浦

幕府分解放近時代掲出。【一三、一四】  
天保改革黨掲出。【三五】  
名は言昌、字は文之。俗姓湯淺氏。父は河内の人。亂を避けて日向福島に居り弘治元年南浦を生む。南浦幼にして聰明、夙に出家の志あり、永祿三年州の延明寺に投す。後市來龍源寺に遷る。や、長じて京に上り東福寺龍吟庵に錫なかけ照春龍喜に學ぶ。既にして西歸し市來龍源寺主となる。慶長四年島津義弘に従ひ京に

上り伏見邸に入る。後水尾帝其學才を開き詔して新注を宮廷に講せしむ。幾もなくして薩摩に歸り家久に侍讀す。慶長十六年家久大龍寺を建て其開山となす。元和六年九月寂す。年六十七。遺稿南浦文集以下數種あり。【一〇】

仁孝天皇  
【八行】

文政天保時代掲出。【八五】

林  
煌

衡の第三子。字は屠翳、培齋、また橙字と號す。幼空鵝賦。又三郎と改む。幼より學を好み佐藤一齋、松崎懋堂に従つて學び、自ら能く樹立し、家聲を隆ます。文化四年六月元服。

林  
衡

文政二年二月學職となり、廩米三百俵、歲例金一百を賜はる。十二年十一月左近將監と稱す。天保九年十一月大學頭に任ず。十年將軍家齊、及び世子家慶の侍讀となる。十一年班を進めて小姓組番頭となり、廩米總て二千俵を賜はる。弘化三年十二月死。年五十四。諡して恭恪先生といふ。【六】

述齋に同じ。松平定信時代、雄藩黨、文政天保時代掲出。【六、九二、九四】

菱川大觀  
尾藤二洲

幕府分解放近時代掲出。【八七、八八】  
名は孝肇、字は志尹。二洲また約山と號す。通稱良佐。伊豫川江村の人。幼にして足疾あり、大阪に出で片山北海に學ぶ。頼春水、中井竹山兄弟

近世日本國民史 人物概覽

平田篤胤

と交り善し。寛政中徳川幕府召して昌平黌の教官たらしめ、俸二百石を賜ふ。又足疾の故を以て特に邸を昌平營内に賜はる。後改めて邸を壹岐殿坂に賜ひ老を養はしむ。文化十年死。年六十九。性恬淡簡易、深く東儒の名分を清風するを憂ひ詳に和漢名稱の當否を辨す。著書素餐錄、正學指掌、稱謂私言、靜寄餘筆等數種あり。【八七、八八、九九】

幼名正吉、通稱大角、氣吹廼舎と號す。秋田の人。安永五年八月生る。始め醫を學び、二十歳の頃江戸に出で苦學すること數年。寛政十二年八月備中松山の城主板倉侯の臣平田藤兵衛平篤穩の嗣となる。是より板倉氏に仕へ江戸に居る。文化元年帷を下して諸生を教授し眞菅乃屋と號

す。四年再び醫となる。六年山下町に移り弘く古道の講説を始む。文政六年板倉侯に暇を乞ひ京に上り著書を天覽に供ふ。是より著書少ならず。天保九年改めて秋田藩中となり祿百石を食む。十四年六月秋田に歸り間もなく疾を得て閏九月十一日死す。年六十八。明治十六年二月正四位を贈らる。【九三】

平田 鐵胤

通稱内藏介。後大角と改む。實は伊豫國新谷藩碧川某の子。文政七年正月篤胤の養子となる。明治の初め參與神祇事務局判事に任じ、後、内國事務局判事に遷る。二年正月侍講となり、同七月大學大博士に進む。三年六月職を辭し、十二年二月大教正に補せらる。及門の士四千餘人に至る。明治十五年十月死。年八十二。

平田 大角

【九三】  
篤胤に同じ。【九四】

深谷 遠江守

名は盛房。十郎左衛門と稱す。文政九年二月目付となり、天保二年八月京都町奉行に移る。同七年十月作事奉行となり八年七月勘定奉行公事方に轉ず。十二年四月小普請支配となり。十五年十二月大目付海防掛となる。嘉永七年七月辭す。【二九、三七】  
幕府分解接近時代、雄藩篇、天保改革篇掲出。【七四、八〇、九五、九六、九七、九八、九九】

藤田 幽谷

田沼時代、雄藩篇、文政天保時代、天保改革篇掲出。【七四、八〇、八一、八三、九五】

藤田 東湖

物 徂 徠

萩生徂徠に同じ。名は雙松、字は茂

卿、通稱總右衛門、徂徠は其號なり。本姓物部氏なるを以て自ら修して物

といふ。父方庵は幕府の醫官なりしが、事により上總に配せられしを以て從ひ行く。居ること十二年にして歸り帷を芝浦に下し教授自ら給す。後柳澤吉保に登用せられ、累進して五百石を給せられ番頭格に進む。是より名聲漸く著ばれ、遂に復古學の一派を開く。後五代將軍綱吉に經書を進講し、又八代將軍吉宗の命を受け六諭衍義を和譯す。享保十三年正月死。年六十三。或はいふ。六十五と。江戸芝長松寺に葬る。【八六、八八、八九】

堀田 正睦

天保改革篇掲出。【一〇、一一】  
親壺に同じ。天保改革篇掲出。【一〇、一一、一二、二九、三〇、三六】

本多 利明

幕府分解接近時代掲出。【七二】  
正信の子。小字千徳丸、後彌八郎。徳川家康の近侍となり、後執事にすむ。慶長五年の變起るや、馳せて急を下野小山の行營に告ぐ。翌年五月從五位下に叙し上野介と稱す。後ち下野小山三萬二千石を賜ひ、元和五年加封して宇都宮十五萬石を食む。元和八年最上義俊が國除かるゝ事に關し、罪を得て出羽の由利に流さる。寛永元年四月横手に移り。十四年三月謫所に死す。年七十三。【九、一〇四】

本多 正純

堀田 攝津守

天保改革篇掲出。【三三、三六】

近世日本國民史 人物概覽

【マ行】

マ

牧志摩守

名は義制。嘉永二年十月先手加役より小普請奉行となり、同三年十一月長崎奉行となる。六年四月西丸留守居に移る。【一〇二】

牧野忠雅

越後長岡侯。天保十四年十一月所司代より老中に移り勝手掛并海防掛りとなる。嘉永六年九月溜田詰格に移る。【一、四、五、一〇、一六、三七】

松浦清

田沼時代掲出。【六】

松平容敬

會津藩主。容住の三男。幼字慶三郎。文政五年兄容衆の嗣となり封を襲ぐ。侍従肥後守に任ず。八年九月京都に朝し正四位下左中將に任ぜらる。性篤實勤儉、常に武備を修め士風を正し専ら祖業紹述に力め下民の信頼を受く。弘化以來幕命を奉じて

江戸内海の警備に當り頗る功あり。嘉永五年二月死。年五十。大正十三年二月從三位を贈らる。【三九】

松平定永

文政天保時代掲出。【六三】

松平忠温

戸田忠温に同じ。【六】

松平齊省

實は將軍家齊第二十四子。幼字紀五郎。文政六年正月生る。十年七月松平齊典に養はれ立つて世子となる。十二月齊典の溜池の邸に移る。天保六年十二月將軍の偏諱を賜ひ齊省と稱す。同十二年五月溜池邸に死す。年十九。隆章院從四位上左少將兼協誼禮大居士と諡す。【一、四】

松平齊典

文政天保時代掲出。【一、四、五、二〇】

前田利家

五、三九、四〇、四二、四三、六三】  
小字は犬千代、孫四郎、又左衛門と稱す。尾張海東郡の人。利昌の第四子。幼より信長に仕へ、永祿十一年兄利久に代りて宗家を嗣ぎ、二千四百五十貫の地を食む。後近江長濱一萬石を賜はり、天正三年越前府中三萬三千石を領す。信長歿せらるゝに及び、秀吉に屬し、加賀能登を領し尾山城に居る。累遷して從二位權大納言に叙せらる。慶長四年閏三月死。年六十二。【一〇三】

水野越前守

水野忠邦に同じ。【一一、三〇、三六、三七】

水野金五郎

忠邦の長子。後忠精と名づく。和泉守と稱す。文久二年若年寄より老中

近世日本國民史 人物概覽

水野忠邦

文政天保時代、天保改革黨掲出。【一、四、五、七、八、九、一〇、一一、三〇、三七、八五】

水野忠成

文政天保時代掲出。【六】

水戸源義公

光圀に同じ。【九三】

水戸齊昭

徳川齊昭に同じ。幕府分解接近時代、雄藩黨、天保改革黨掲出。【五、一〇、一一、一八、一九、二六、二七、二八、四五、四六、五九、六四、六五、六七、六八、七七、八四、九五、一〇三】

水戸光圀

徳川光圀に同じ。【七四、九三、一〇三】

源頼朝

鎌倉第一代の將軍。義朝の第三子。小字鬼武者。保元の亂十三歳、父と共に東國に逃る。途にて捕へられ伊豆に流さる。治承四年以仁玉の令旨を奉じて兵を擧げ、弟範頼義經を遣はして義仲及び平氏を滅し、又奥州を平げ、日本總追捕使となり、遂に兵馬の權を握る。正治元年正月死。年五十三。【八八、一〇一】

室直清

學ぶ。故に和漢の學に通じ詩文和歌を善くし、また書法に巧なり。妙法院一品親王の寵を得、詩歌を奉りて物を賜はるること屢なり。文化八年二月死。年六十六。著書歌苑類題抄、和學大概、齊明紀童謠考後案、假名拾葉、琴後集、錦織雜記等少なからず。【九一、九二】  
鳩巢に同じ。松平定信時代掲出。【八六】

モ

本居宣長

寶曆明和篇掲出。【八九、九〇、九一、九三】

物部茂卿

物徂徠に同じ。【九二】

桃園天皇

寶曆明和篇掲出。【一〇三】

【ヤ行】

ム

村上義禮

大學に同じ。幕府分解接近時代掲出。【六〇】

村田春海

字は士觀、通稱平四郎。錦織齊また琴後翁と號す。延享三年生る。始め賀茂眞淵に從ひ古言を學び、また服部仲英、鶴殿士寧、皆川淇園等に儒を

ヤ

柳生伊勢守

天保改革篇掲出。【一二】

矢部定謙

文政天保時代、天保改革篇掲出。【六】

山鹿素行

松平定信時代掲出。【九一】

山縣大貳

寶曆明和篇以下各篇掲出。【九九】

山國喜八郎

水戸藩世臣なり。名は共昌。止戈堂と號す。剛毅勇敢、文武に達す。殊に兵學を好み其蘊奥を極む。藩主齊昭の軍制改革に際し樞機に參與す。天保甲辰齊昭諱を蒙るの時禁錮にあひ、四年を経て免さる。嘉永六年再び藩政に關與し、海防の事を司る。此頃徳川慶喜の一橋邸に召され、月次兵學を講ず。來り學ぶもの頗る多し。安政賜勅の時罪を獲、文久二年免さる。翌三年藩主慶篤に從ひ上京禁閣を護る。後松平頼徳に從ひ事を

山崎闇齋

成さんとし、頼徳殉難の後武田正生等と謀り、衆を率ゐて西上せんとし、途にて捕はれ、教習に禁錮せられ、慶應元年二月斬に遇ふ。時に年七十二。【五】  
松平定信時代掲出。【八六】

由比正雪

生田地明かならず。或はいふ、駿河油井紺屋の子と。或はいふ、同國有度郡足洗村の農夫の子と。或はいふ、同國府中宮ヶ崎農家の子と。又少年の際臨濟寺に學ぶとも、清見寺に學ぶとも傳ふ。やゝ長じて江戸に來り楠派の軍法と稱するものを傳授し、生活の資料とす。來り學ぶもの頗る多し。遂に一揆を企て謀洩れ、慶安四年七月駿州府中の旅館にて捕へら

れんとして自殺す。【一〇五】

【ラ行】

ラ

頼山陽

松平定信時代以下各篇掲出。【二〇、九、一〇一】

頼春水

松平定信時代、幕府分解放接近時代掲出。【九九】

リ

林子平

田沼時代、松平定信時代、幕府分解放接近時代、雄藩篇掲出。【七二】

【ワ行】

ワ

王安石

字は介甫、半山と號す。宋の撫州臨川の人。文を作るに筆を動かす飛ぶが如し。議論高奇、能く辨博を以て

渡邊寧山

其説をなす。夙に矯世變俗の志あり。神宗用ひて以て參政となし、其の建議にかゝる新法を行はしむ。ついで相となり荊國公に封ぜらる。政を執ること六年、怨讒紛出して皆新法を咎む。遂に安んずる能はず自ら引き去る。元祐元年死。年六十八、太傅を贈られ、文と諡す。著書周禮新義、毛詩義、臨川集等あり。【八七】  
渡邊登に同じ。文政天保時代、天保改革篇掲出。【二】

索引

【ア行】

ア

秋田	六、七八
飽海郡	一〇、一五
飽海郡江地	六
麻布	一四七
アストリア	三三八
熱田宮	四六〇
安房	三〇六
安房崎	三九
會津	六、七
會津城	一九一
亞墨利加	一三〇
亞米利加洲	二〇七、二五

イ、井

廈門	一八五
アラスカ	二四三
荒瀬郷	九
青森	三五五
アンゲリヤ	一三〇
諸厄利	三六九
諸厄利亞	三九七
英吉利	四二四
伊勢大神宮	九
伊豆	三〇六
伊豆岬	一九〇
岩槻	二六、二七
飯田	一五〇、一六六
飯田町九段坂	一四九
印度	四一四

ウ

宇都宮……………二七  
 宇都宮城……………五〇  
 浦賀……………六二、一三一、一三四、一三七、一九九、一九〇、一九六、  
 一九七、二〇一、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、  
 二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、  
 二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、  
 二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、  
 二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、  
 浦賀町……………一八九  
 浦賀湊……………一九五、二〇五、二〇九、二三八  
 浦賀灣……………一四四、一九五、三〇九  
 エゲレス……………三三三  
 蝦夷……………二九〇、三六八、三九七  
 江戸……………二、九、一三、二八、四七、五五、八三、一八、一五〇、一五三、  
 一八三、一九一、二三五、二四八、二六八、三三一、三五五、三七  
 五、四四三、四四四、四六三、四七七、四八三、五〇八、五一四  
 江戸海……………一九五  
 江戸城……………三三  
 江戸府……………三三  
 江戸港……………二五三  
 エトロフ……………三五八

エ、ア

樺捉嶋……………三三、三九、三三三、三〇三  
 江戸灣……………一八九、一九三、一九四、二〇三、三〇五、三〇八  
 遠州濱松……………一五三  
 奥羽……………三三九、三五六、三七六  
 奥州宮古村……………一九四  
 忍……………二一〇  
 忍城……………一三〇、一九一  
 小田原……………一九三、二一〇  
 ワタロ……………二六〇  
 大阪……………一七三、二七三、二七四  
 大阪城……………三〇  
 大隅……………一三〇  
 大津……………二一一  
 オホーツカ……………二四六  
 フホツツカ……………三五八  
 大泊……………三五五

オ、ヲ

大井川……………二九六  
 大井村……………一五六、一六五  
 オレゴン州……………三三八、二四六

【カ行】

カ

高知……………三五五  
 麹町三丁目……………三八  
 鹿兒島……………一〇七、一三〇  
 鹿兒島港……………二五〇  
 上穂……………二九六、三〇六、三〇七  
 金澤……………三五五  
 川越……………一、二、二五、二一〇  
 川越城……………一六、一三〇、一九一  
 川南馬町……………六  
 川南西郷組……………九  
 甲崎……………三二〇

神島……………三二〇  
 カムシヤツカ……………二四六  
 加波沙都葛……………三五八  
 カリホルニ……………二四六、二五六  
 加州……………二四四  
 廣東……………二六、一八五、一八六、二〇八、二四八

キ

木曾川……………五〇六  
 北亞美利駕洲……………二五六、二七五  
 北亞墨利加……………二二三  
 北太平洋……………二四三  
 京都……………四七、五〇、六六、四四三、五〇二、五〇四、五〇八

ク

クナシリ……………三五八  
 桑名……………三〇九  
 熊本……………三五五

月山 ..... 七  
 廣東 ..... 六三  
 觀音崎 ..... 三〇八、三〇九  
 觀音山 ..... 三二〇  
 京師 ..... 三三五

ケ

古河城 ..... 五〇  
 黒龍江 ..... 三五七  
 駒籠 ..... 九三  
 混同江 ..... 三五七

コ

相州浦賀 ..... 一三〇  
 酒田港 ..... 一六一八

サ

【サ行】

相模 ..... 三〇六  
 薩州 ..... 一四〇  
 薩摩 ..... 一三三、一三八、一三〇  
 薩摩地 ..... 六三  
 サンガー海峡 ..... 三三三  
 三韓 ..... 四八八  
 サンジュアン河 ..... 二四四  
 サンフランシスコ ..... 二四八

シ

七島 ..... 一四一  
 支那 ..... 三五四、四二四  
 品川 ..... 二九六  
 十文字村 ..... 六  
 西伯利 ..... 四一四  
 止白里 ..... 三五八  
 下田 ..... 二九六、三〇六  
 下田灣 ..... 一九〇

下總 ..... 二九六、三〇六  
 下總銚子 ..... 一九七  
 下總銚子港 ..... 一九四  
 城ヶ嶋 ..... 一九〇、二〇五、二一一、三〇九  
 庄内 ..... 二、三、四、五、八、一〇、一四、一六、二二、二五、三二  
 庄内藩 ..... 二二、二四  
 庄内領 ..... 一八  
 咬囉吧 ..... 二五三、二六一、二七一  
 上海 ..... 一八五、二四八  
 肅慎 ..... 四八八  
 白河 ..... 三〇九

ス

百首 ..... 三二〇  
 洲之崎 ..... 三二〇  
 須走崎 ..... 三二〇

セ

【タ行】

購所 ..... 三五五  
 ゼルマニヤ  
 熱馬 ..... 三六八  
 千艘浦 ..... 二二  
 仙臺 ..... 六七、九、三五五  
 仙臺府 ..... 三五八  
 仙臺領 ..... 三

タ

太平洋 ..... 一三  
 田川郡 ..... 一〇、一八  
 田川郡西郷組 ..... 六  
 度佳喇島 ..... 三〇  
 高鈴 ..... 三〇  
 寶島 ..... 一三  
 度加羅島 ..... 一三、一七一、一三  
 田尻村 ..... 一三、一三

橋浦 ..... 一九四  
 龍田 ..... 八五  
 龍田 ..... 三五七  
 種子 ..... 三七一

チ

中山 ..... 一三五、一四三  
 女眞 ..... 三六八  
 千代崎 ..... 一九一  
 千代田城 ..... 三一  
 吉林城 ..... 三五七

ツ

筑紫 ..... 三六八  
 津輕 ..... 二五八、三一、三三九  
 豆州 ..... 二九六  
 對馬 ..... 一三二、二四八、三二一  
 鶴岡 ..... 三

鶴ヶ岡 ..... 一一  
 鶴崎 ..... 二二一

テ

朝鮮 ..... 一〇〇、一〇五  
 出羽山形 ..... 一五三  
 天竺 ..... 三五四

ト

常盤橋 ..... 一五三  
 遠江洋 ..... 二二一  
 トモシイ ..... 三九  
 度爾格 ..... 三六八

【ナ行】

ナ ..... 二二五  
 長岡 ..... 二二五

長岡城 ..... 五〇  
 長岡領 ..... 一八  
 中川組 ..... 九  
 長崎 ..... 五四、五七、八六、二三八、二三四、二三八、二八一、二八一、  
 一八八、一九九、三〇〇、三〇八、三三四、三三八、三三九、三三三、  
 三三三、三四二、三六七、二七四、二九〇、二九一、三〇一、  
 三〇二、三〇五、三四〇、三六六、五二四  
 長崎港 ..... 八三、二五二、二七三、三三二  
 長崎役所 ..... 一五三  
 中山 ..... 一八三、二八四〇、四四  
 中山村 ..... 三二、四二、四三  
 名古屋 ..... 五〇六  
 名護屋 ..... 三五五  
 浪華 ..... 三五五  
 那覇江 ..... 二五〇  
 那覇港 ..... 二七、二九  
 ニーウカラナーグ ..... 二四六  
 ニカラガ湖 ..... 二四四

ニ

新潟港 ..... 一六、一八  
 紐育 ..... 二四四  
 蕪山 ..... 一九〇  
 寧波 ..... 一八

又

沼垂 ..... 三五五

ネ

ネウヨルク ..... 二二二、三三三、二五六

ノ

野比濱 ..... 二〇七  
 野比村 ..... 二〇五  
 野比村沖 ..... 二〇九

【ハ行】

ハ

房州朝夷村 ..... 二九六  
 房州白子沖 ..... 一九七  
 房州洲之崎 ..... 一九七  
 房州館山浦 ..... 一九七  
 房州館山港 ..... 一九七  
 房州守谷村 ..... 一九七  
 博多 ..... 三五五  
 萩 ..... 三五五  
 羽黒山 ..... 七  
 箱根 ..... 二九六  
 走水 ..... 三〇八、三〇九  
 バグワイヤ ..... 三三〇  
 バタビヤ ..... 二七六  
 八丈 ..... 三七一  
 八丈島 ..... 三三一  
 パナマ ..... 二四六  
 布哇島 ..... 三三〇、三四四

ヒ

日向 ..... 一三〇  
 彦根 ..... 一九一  
 常陸 ..... 三〇二  
 常陸北郡大津村 ..... 四七一  
 氷海 ..... 二四六  
 平田郷 ..... 九  
 平戸 ..... 二七

フ

フィラデルフィヤ ..... 三三六  
 フェンフロンク ..... 二五三  
 深川油堀 ..... 一五〇  
 福建 ..... 一〇五  
 福建省 ..... 一三六  
 福州 ..... 一六、一八五  
 福山 ..... 二六

福山城 ..... 二七、二八  
 武州大井村 ..... 一五四  
 府中 ..... 三五五  
 船橋九日市村 ..... 四三、四四  
 佛郎西 ..... 二四九  
 豊後臼杵 ..... 一六〇

ヘ

ヘリンクスタライト ..... 二四六  
 百兒西 ..... 三六八

ホ

北米合衆國 ..... 三六八、四四四  
 北陸 ..... 三五六  
 ボケープセ ..... 三三三  
 香港 ..... 一八五、一八六

【マ行】

マ

瑪港 ..... 二〇五  
 松江 ..... 三五五  
 松代 ..... 三  
 松代城 ..... 五〇  
 松前 ..... 三三四、三三八、三三〇、三四八、三五二、三五六  
 松前津 ..... 二五二  
 マヒル ..... 二六〇

ミ

三浦郡 ..... 一九〇  
 三崎 ..... 一九一、二〇一、三〇九  
 三崎城ヶ島 ..... 三〇八  
 水戸 ..... 七、九、一四三、二八六、三五、三六二、三七四、四二、四四三  
 南遊佐村中島 ..... 六  
 宮津 ..... 二七  
 宮古 ..... 二一六

宮古島 ..... 一六六  
宮古港 ..... 一五八

メ

墨西哥 ..... 二四四

モ

蒙古 ..... 三六八  
唐山 ..... 一〇六、一〇七

【ヤ行】

ヤ

披玖 ..... 三七一  
谷中 ..... 四四  
八重山 ..... 一六  
八重山島 ..... 一六、一三六  
山川港 ..... 一一九

ユ

遊佐郷 ..... 九  
遊佐郷向富田村 ..... 七  
遊佐郷上野新田 ..... 六  
湯殿山 ..... 七  
由利郡鹽越 ..... 九

ヨ

吉野 ..... 八五  
吉野山 ..... 八五  
四ツ谷 ..... 一五  
與那國島 ..... 一六

【ラ行】

リ

琉球 ..... 五七、一〇〇、一〇四、一〇五、一〇六、一〇八、一三三、  
一一四、一一九、一二三、一二四、一三六、二〇、二三  
二二三、一三六、一四〇、一四二、一四八

琉球那覇港 ..... 一六

ル

呂宋 ..... 一六

ロ

魯西亞 ..... 三五八、三九七  
露西亞 ..... 四一四  
ロシア ..... 三六八、三六九、三八二  
鄂羅 ..... 三六八、三六九、三八二

【ワ行】

ワ

若松 ..... 八五  
ワシントン ..... 二四七

昭和三年九月二十三日印刷

昭和三年九月二十五日發行

不許複製

近世日本幕府實力失墜時代並製奥付  
國民史

定價金貳圓五拾錢

著者 德富猪一郎

發行兼印刷者 渡邊為藏  
東京市京橋區日吉町

印刷所 民友社  
東京市京橋區日吉町

發行所 民友社  
東京市京橋區日吉町

總發行所 東京一三〇〇

民友社出版圖書目錄

東京市京橋區日吉町  
振替東京一三一〇〇

# 著郎一猪富德 峰蘇 史民國本日世近

二一の領本色特

## ◆歴史講究熱勃興

當今の社會に歴史講究熱が、轟然として興つて來たのは、邦家前途の爲め慶賀に堪へぬ。これは『近世日本國民史』の刺戟の力、興つて大に居るとは、朝野讀者が萬口一聲の批判である。

## ◆獨闢創造の歴史

近世日本國民史は、其の材料の精確詳審であるのみならず、成る可く前人の功を没せざる爲めに其の史實を採用するのみならず、其の歴史的人物、若くは人物に關係ある權威者をして自ら語らしめてゐる。國民史は著者の獨闢であり、創造である。

## ◆胸中の一大樓閣

著者は胸中に一大樓閣ありて、其の資料に古人を使用する迄で、この偉大なる國民史は、著者の匠心獨造である。而してこの大建築は、實に大正昭和の御代を象徴す可き一大偉觀であるのみならず、帝國文獻の有する曠古の一大産物である。

## ◆特色は綜合大觀

一室には一室の用があり、一階には一階の用がある。然も其の特色は、之を綜合大觀せねばならぬ。蘇峰先生の國民史、亦如此耳。併し國民史を以て、單に世の所謂歴史と同視するは、大なる間違だ。歴史は歴史だが、從來の歴史とは、全く其の本領、面目、趣向を異にしてゐる。

## ◆時代潮流の活描

それは著者は一方に人を見、一方に勢を見。一方に心を見、一方に肉を見、一方に思想を見、一方に生活を。而して兩者が社會を經緯して、時代の潮流に従つて動く清態を描き且つ叙し、且つ論ずるからである。これ從來の史書に見る能はざる特徴の一だ。

## ◆秩序的百科字彙

されば國民史は、近世日本のあらゆる寶庫だ。政治でも、風俗でも、商業でも、工業でも、農業でも、世の中の森羅萬象、殆ど悉く其の大綱大要を囊括して漏らす所がない。されば國民史を以て、秩序的の近世日本百科字彙と云ふも妨げまい。

# 史民國本日世近

(7) 豊臣氏朝鮮役 丁篇 卷上	(6) 豊臣氏時代 丙篇	(5) 豊臣氏時代 乙篇	(4) 豊臣氏時代 甲篇	(3) 織田氏時代 後篇	(2) 織田氏時代 中篇	(1) 織田氏時代 前篇
---------------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------

本篇は近世日本國民史の最源頭をなすもので、筆を室町幕府の末期に起し、其の衰亡に止む。眞に信長の霸業創始時代の記録也。

本篇は信長が、銳意努力の時代を叙述したるもので、長篠戦争を始め、安土城の經營、毛利氏との關係、丹波方面の手入れ等に至る。

本篇は信長が最活動最得意の時代を叙述したもので、武田氏の滅亡、信長父子の死等を描き、最後に信長の全體を顯現したるもの。

本篇は秀吉の素生出身に筆を起し、後織田氏時代に接續して、秀吉の創業時代を叙述したもので、一代の英雄秀吉の立志傳なり。

本篇は秀吉が五十一歳から、五十三歳に至る最も油の乗りたる期間の記録で、秀吉の生涯中最得意の時代である。

本篇は秀吉時代の落着を示し、北條氏退治を骨子として、東北の平定、家康の移封の他に、我使節の羅馬入りに及ぶ。

本篇は著者が最も精力を傾注し、大和民族の海外葛藤より、秀吉の外征、行長の平壤入り、其他日本軍制海樞の失墜に終る。

製上 菊判 定價 各五圓  
製並 菊判 定價 各三圓  
送料 各十錢  
送料 各二十錢

# 近世日本國史

(8) 豊臣氏時代 朝鮮役 卷中	(9) 豊臣氏時代 朝鮮役 卷下	(10) 豊臣氏時代 桃山時代概観	(11) 家康時代 關原役	(12) 家康時代 大阪役	(13) 家康時代 家康時代概観	(14) 徳川幕府 鎖國篇
------------------------	------------------------	----------------------	------------------	------------------	---------------------	------------------

本篇は朝鮮役に於ける日明外交史にして、朝鮮が明の救援を請ふに始まり、明の神宗皇帝が秀吉を日本國王に封するに終る。

本篇は朝鮮役の總勘定にして、講和評定の経緯より秀吉の死と日本軍の總撤退に至り、關白秀次の破滅秀頼の成立を叙す。

本篇は日本歴史に磨滅すべからざる華麗絢爛たる文化の一時期を劃した、桃山時代の多趣多様、各種各方面に互る特色、概観を描く。

本篇は秀吉死後の形勢より、關原一戦に於て石田三成が家康と雄雄を決せんとして、如何に震天動地の活劇を演じたかを叙す。

本篇は天下の名實徳川氏に歸し、遂に大阪冬陣夏陣の開始となり大阪城陥り豊臣氏全くとぶるの狀を叙したる哀史なり。

本篇は家康の人物と、其の一生の事功とを精審に叙述したもので、徳川幕府施政の根本義に始り、家康の臨終に至るまでを記述す。

本篇は鎖國政策に關聯した内外一切の出來事を、豊富なる材料と精緻なる史筆とに因りて叙述したもので、島原役の顛末等をも記述す。

製上 菊判 定價 各五圓 送料 各十錢  
製並 菊判 定價 各三圓 送料 各二十錢

# 近世日本國史

(15) 徳川幕府 統制篇	(15) 徳川幕府 思想篇	(17) 元祿時代 政治篇	(19) 元祿時代 義士篇	(19) 元祿時代 世相篇	(20) 元祿享保中間時代	(21) 吉宗時代
------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	---------------	-----------

本篇は、幕府對朝廷關係の記述で、朝幕衝突を始め、諸大名改易、親藩連枝處置の顛末の如き、最も幕府の醜惡を抉出す。

本篇は尊王及び國體の思想の胚胎と、發達の來歴を記述し、殊に水戸光圀に關しては特筆大書し、山比正雪事件に及ぶ。

本篇は幕府の政治を記述すると共に、綱吉公、桂昌院、堀田、柳澤等の人物を批判し、時の後光明天皇の御事をも記載す。

本篇は赤穂義舉事件の記述で、單に興味中心を目的とせず、其の原因を究め、世論を批判し獨特の觀察の下に成る眞の義士觀なり。

本篇は元祿時代各方面の代表的人物と、業績を記し、瑞賢、奈良茂、辰五郎等の實業家や、西鶴、近松、芭蕉、狩野、英、等を擧ぐ。

本篇は家宣、家繼時代に、新井白石が如何に活躍したかを精叙し、羅馬人シドッチの渡來、江島事件等の特筆して概観に及ぶ。

本篇は將軍政治の興の一時期たる吉宗時代の施設萬般を縱横に叙述し、吉宗の人物は勿論、更に文教發達の方面をも特筆した。

(上製)價 五、〇〇  
(並製)價 二、五〇  
送料 二、〇〇

製上 菊判 定價 各五圓 送料 各十錢  
製並 菊判 定價 各三圓 送料 各二十錢

# 近世日本國史

(22) 寶曆明和篇	(23) 田沼時代	(24) 松平定信時代	(25) 幕府分解接近時代	(26) 雄藩篇	(27) 文政天保時代	(28) 天保改革篇
本篇は桃園天皇を中心としたる、攝家對平ら公家の葛藤、竹内式部、山縣大貳の二大事件を詳述し、幕府倒壞の因を説く。	本篇は田沼時代に向つて嚴正なる批判を下し、田沼意次の人物を詳細に解剖し、慶學興隆を物語り、上杉鷹山の劇的場面にも及ぶ。	本篇は時の老中松平定信を中心として當時の諸相を評述批判し、就中光格天皇の尊號宣下事件を解剖論評した點本書特獨。	本書は徳川十一代將軍家齊時代、幕府の崩壞する勢を解き、外國船の接近に國防論章王攘夷論の湧出を述べる。	本書は徳川末期に於ける諸藩の形勢を論じ、殊に薩摩、長州、水戸の三大雄藩を論評す。蓋し此の三雄藩は維新に最も活躍せるもの。	本書は徳川幕府の礎を搦がす第一弊たる大鹽平八郎事件を詳述し、その徹底的研究を遂げ、當時愈々肉迫し來れる外國船の情勢と錢屋五兵衛その他當時の密貿易者に及ぶ。	本書は水野忠邦の斷行せる天保改革を詳述論評して、水戸藩對幕府の確執に及び、當時の對外事情より前邊華山、高野長英の疑獄及び高島秋帆、江川太郎左衛門を説く。

上製 菊判 定價 各五圓  
並製 四六判 定價 各二圓五錢  
送料 各十錢  
並製 四六判 定價 各八錢  
送料 各二十錢

## 近世日本國史

(29) 幕府實力失墜時代	(30) 波現來航以前の形勢
---------------	----------------

本書は轉封事件より中央政府のいよゝゝ衰へ來りしを説き、阿部正弘の立身より天保改革の後始末に及び、英米露の益々肉迫し來りて正に鎖國主義の最後近づきたるを論ず。

上製 各定價五圓  
並製 各定價四圓五錢  
送料 各十錢

## 蘇峰叢書

二月十一日は日本帝國建立の日だ。此の日出度き日に本叢書は發刊された。蓋し本叢書は蘇峰學人の最近十數年に於ける文筆生活を代表する金字塔である。その種目は、天然、政治、文學、宗教、美術、風俗、その他凡そ人間生活に觸れるもの總てに亘つてある。本叢書は正に大正、昭和の日本を表象する活時代史である。

第一冊 皇室と國民  
第二冊 名山遊記  
第三冊 國民と政治

第四冊 好書品題  
第五冊 書齋感興

以上五冊既刊。以下毎月一冊宛續刊の豫定

蘇峰先生水戸の爲めに義憤を發し此の快著が出來た。本書は維新に於ける水戸の功績を發揚し、當年の時勢を論明し、史眼炬の如く光輝萬丈眞に痛快淋漓を極む。就中井伊直弼に對する是非に對して百年の定論を與ふ。

蘇峰先生水戸の爲めに義憤を發し此の快著が出來た。本書は維新に於ける水戸の功績を發揚し、當年の時勢を論明し、史眼炬の如く光輝萬丈眞に痛快淋漓を極む。就中井伊直弼に對する是非に對して百年の定論を與ふ。

蘇峰先生水戸の爲めに義憤を發し此の快著が出來た。本書は維新に於ける水戸の功績を發揚し、當年の時勢を論明し、史眼炬の如く光輝萬丈眞に痛快淋漓を極む。就中井伊直弼に對する是非に對して百年の定論を與ふ。

上製 定價 各四圓  
並製 定價 各三圓  
送料 各六錢

新刊 維新回天の偉業に於ける水戸の功績

孝明天皇御繪旨(武通)頭頭に  
同治天皇御宸筆(御製)敬揭 蘇峰 徳富猪一郎著



蘇峰 德富猪一郎 著

大正の青年と帝國の前途

改版 時務一家言

大和民族の醒覺

三十七八年役と外交

蘇峰文 精神の復興

政界の革新

改版 吉田松陰

改版 靜思餘錄

還曆記念出版 烟霞勝遊記 上卷(品切) 下卷(品切)

日本帝國の使命遂行と、國民の覺悟とに就て、大正の青年の精神元氣を、鼓舞作興した國運興隆の指針盤。

蘇峰先生の思想経綸の大體大綱を説示した書で、其生命を打込み、熱血を注ぎたる述作言論の精粹。

日本問題に關して、蘇峰先生が幾多の醒覺を力説された警告書で、同胞諸君の自奮を促す必讀書。

日本國の血を湧かした、三十七八年役の公判に批判し、當時崇議に參與した著者が公平に批判し、赤裸に暴露した世界的奇書。

如何にして國民的精神を興隆し、實力を養成すべきかを啓示した、愛國的熱誠の溢れたる精神復興の指針。

清浦内閣を中心として一世を震駭したもので政界の革新を絶叫した活文字。

維新改革時代の代表的人物たる松陰の眞傳として、唯一なる獨特の權威を有す。青年諸君の一讀を待つ。

蘇峰先生の廿五歳より卅二歳に至る時代の精神の結晶品で、最も用筆の韻致に饒み感興不盡の名著。

蘇峰先生の興味饒き勝遊の産、多彩なる名勝記、又胸底湧出の印象記で、足跡北海道より滿鮮に連なる。感興不盡、紀行文の隨一、旅行の好伴侶。

三六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

蘇峰 德富猪一郎 著

蘇峰隨筆

第二蘇峰隨筆

第一人物隨錄

野史亭獨語

賴山陽

賴山陽書翰集

改版 幕府衰亡論

西半球を巡りて

先生の學問、識見、趣味、修養、好尚、即ち全人格が最も鮮明に發揮せられたもの。自然、人事、群籍、思想の隨處、風趣横溢。

概ね震災後の世稿で、從つて記述眞趣味多く、讀者の感興を惹くこと深し。其の執れにも先生獨特の觀察識見あり、隨筆の絶好。

獨稿の眼孔筆致を以て、東西古今の人物を捉へ來りて、能く其の眞を傳ふ。著者が「書くこと」を禁じ得ざる判那に於て書いたところ、本書の眞價がある。

本書は蘇峰先生が湘南遊子の野史亭に於て、四題を收む。其の題目内容は豊富なる。小の精細なれば、讀者即ち感興を大に大記す。

賴山陽は若者幼少の頃から、愛好傾倒した人物の一人だ。本書は三十餘年の間博搜した資料と研究した山陽の全面目録如。

本書は、江蘇の所蔵を採求して得たるも、分類編纂したるも、研究の下の年代順に成したる空前の産物。自ら山陽自叙傳を大に分類したるもの。

本書は幕府衰亡の因由、歸結を詳論して、必讀の價値ある名著。觀察正鵠、意見公正、論斷適當、而して平明、淡泊、然も情と理と勢とを揣摩して要領を得たる、ところ無此。

著者は世界を家として、足跡渾球に普し。本書は南北中米十二ヶ國、三萬七千餘哩の展覧策の経綸を絶説する快著。

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

四六判上 定價 十二錢

德富猪一郎 著  
光吉元次郎 共著  
蘇峰學人序

井上雅二 著  
蘇峰學人序

蘇峰學人序

定價 十二錢



著名四題問村農				花 蘆			
農學博士 小野武夫著				著郎次健富德			
農學博士 中島九郎述	フオイト 博士原著 水野常吉譯	フオイト 博士原著	フオイト 博士述	改版 小思出の記	改版 不如歸	改版 自然と人生	改版 名婦鑑
現時の農村問題	丁抹の農村と 其の教育	農村問題講演	村の辻を往く	著者の初期の傑作で、主人公の幼時よりの運命の曲折と、生存の悩みと、戀愛の歡喜と、結婚の幸福を描いた長編小説。	本書を一度讀むに思ひがある。古の名婦の跡をたづねるの思ひがある。古の名婦の跡をたづねるの思ひがある。古の名婦の跡をたづねるの思ひがある。	萬人の胸に激する魅力ある本書は、實に現存に至るまで、其の需要は出版界の記録を破る。精彩ある自然と人生のスケッチを見よ。	讀書界の視聽を集めた本書は、津々浦々にまで知られた武男と、平子を中心とした悲愴な物語で、何人も一度は手にすべき不朽の名篇。
米國問題、小作爭議、農村生活の改善等、其他農村に於ける現代の政治、經濟、社會上多くの問題を實際より研究した良書。	世界的唯一の模範たる丁抹の農村と教育とを説ける農村問題解決の鍵にして、國富増進の典型を明示したる利川厚生の好指針。	斯界の世界的權威者たる博士が、先年來朝の際、我が農村問題の解決に一大刺戟を與へられたる農村及び教育問題の講演集。	本書は各方面より見たる農村生活の改善等を實際の例を擧げて、極めて面白く平易に論述したる近來の快著。	送定 四六判並製 料價六拾並製 料價六拾並製 料價六拾並製 料價六拾並製	送定 四六判並製 料價六拾並製 料價六拾並製 料價六拾並製 料價六拾並製	送定 四六判並製 料價六拾並製 料價六拾並製 料價六拾並製 料價六拾並製	送定 四六判並製 料價六拾並製 料價六拾並製 料價六拾並製 料價六拾並製

正岡子規 監修				國民教育獎勵會編			
文學博士 澤柳政太郎編				英國 イウオーマー原著 堀敏一譯述			
下位春吉述	友會編	駒澤裁縫學院長 坂井光子	實傳	師範大學 講座第一輯	師範大學 講座第二輯	師範大學 講座第一輯	師範大學 講座第二輯
新俳句	現代文化と教育	修身科	宗教科	現代教育の警鐘	太平洋戦争	フアツシヨ運動	大倉鶴彦翁
明治類題の句集で、題目の豊富、句數の多くなることを特色とし、斯界の長書。子規居士の監修に高き識見を覗ふべし。	故厨川博士、深田博士、阿部博士、大原博士、上野博士、澤柳博士、入澤博士、大教授等の文化教育の講演集にして、絶好の必讀書。	本會新設講座の第一回講演筆記である。理論と實際の両方面から説いた修身科の研究。教育者諸君補習用の絶好書。	神教、佛教、基督教、儒教即ち世界四大宗教の眞髓を四大家が最も知的、而かも平易に叙したるもの。今まで求めて得られざりし書。	本書は我國唯一の實際教育の研究學校たる所の名城小學校の苦心經營と十ヶ年努力とを披瀝せしもの。天下教育改造の警鐘である。	日米將來の謎を解き、且つ語る稀有の快書にして、日米の將來を知らんと欲するものは是非一讀あれ。	伊太利國民運動に参加した著者の講演筆記。愛國運動振りが如何に躍如たるかを見よ。	實業界の大立物として、一世の快男兒たる翁が、裸一貫から今日の大成功をした絶好の立志篇。
送定 四六判並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製	送定 四六判並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製	送定 四六判並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製	送定 四六判並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製	送定 四六判並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製	送定 四六判並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製	送定 四六判並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製	送定 四六判並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製 料價八拾並製

家庭向型紙いらす坂井式洋服裁縫

一讀すれば直ぐ小供も出來る重寶な書

## 民友社小史と 出版の圖書

民友社は明治二十年二月、蘇峰徳富猪一郎氏の創立する所だ。爾來こゝに四十年、明治大正を通じて、此の如き永き生命と、しかも恒に生々不息の精神を以て、國家の進運に貢献しつゝある當業者は、他に其匹を見ない。

『國民之友』の刊行が、明治文化の促成に寄與したことは言を須たず、『家庭雜誌』を刊行して、婦人醒覺の先唱者となり、『英文極東』を刊行して、日本を世界に紹介したのも、當年の一大驚異であつた。其の出版した圖書は、蘇峰學人等身の著作を中心とし、更に政治、文學、教育、經濟等の各方面の名著を網羅し、其の種類千餘種、刊行部數は無慮千萬部にちかく、其の世教に裨益し、人文を開發したるの功績は、天下公論の存する所である。

特に大正時代に入つてからは、蘇峰學人の文章報國の一念は、愈々益々熱烈となり、幾多の名著を打出したが、就中『近世日本國民史』は、畢生の大事業として經始せられ、大正七年五月から今日迄に、三十卷を稿了し、豫定以上確實に進捗しつゝある。

57

394  
43

終

